# 伊東静雄の思い出

昭和四十七年六月十八日

江川　ミキ

今日ここに文学の道に御精進の方々、殊に御遠方からの方たちも、いられますとおききいたします。このお集いに、私如きが、およせいただきまして、伊東静雄の思い出をお話し申しますことは、どんなにか嬉しく、ありがたく感謝いたします。

尚、皆様方には、かねて伊東静雄の詩を御愛読下さつていますとのこと、ほんとうにありがとうございます。伊東静雄も、どんなにか喜んでいることと存じます。

つきましては、伊東静雄が亡くなりましてから、早二十年でございますが、それが昨日かのように思われます。そして、思いますことも、長い間病床でございましたので、ついあの頃のことがよく思い出されます。

実は、あの人は小さい時から、体格がそうよい方でございませず、従つて、食物もほんの少しずつで、お魚などは、それこそおぎりのように、真中だけをちよつちよつとむしり、ひつくり返して、裏の方を、又ちよこちよことむしつて、それで終りでございました。食慾も少いし、それに、お魚の骨がめんどうだつたらしうございます。

でも、小学校五年生までは大した病気もいたさなかつたようでございます。

いたつて明るく、おとなしい子供で、小学校へ行く前など、よく只今の映画、その頃、活動写真というていましたが、その活動写真に父や母につれられて行つたものでございますが、そこで覚えてきた音楽でございましよう、その頃は楽隊というていましたが、その楽隊を、一人遊びや友達との遊びの中で、これは景色の楽隊よ、これはチヤンバラのときの楽隊よと、口での楽隊をよくしていたものでございました。

そして、あの頃あの人が六つの時、明治天皇の御大葬があり、大正天皇の御大典がございました。その活動写真を見に行つて、これは天皇陛下の御大葬の楽隊よと、いともおごそかに又悲しく、かなで、これは御大典の楽隊よと、又違つたところのあつたものでございました。あの人の楽隊といいますのは、母の物差しをもつてきて、それを振り振り、あるいは悲しく、あるいは美しく、そして静かに又荒く、リズムをつけて、時には楽器の音色も加えて、すべて口であらわすのでございます。私にはよく表現できませんけれども、庭のあちこちに立つたり、室の中に立つたり、室の中をまわり歩いたりして、それは得意なものでございました。

四つ五つ六つのあの頃、あどけないあの人の幼姿も、時には思い浮かべて涙をためながら、一人笑いする私でございます。

そして、あの人が五年生の時のことでございます。忘れもいたしませんが、七月十五日に私のすぐ弟で、伊東静雄の次兄で大村中学校の二年である伊東潤三と、そして私が同日に、三日後に又妹が、三人でチブスを発病いたしました。只今なら避病院行きで

ございましようが、あの時は家で養生いたしました。その時、潤三は腹膜炎を併発いたし発病後わずか一ヵ月後の八月十五日に亡くなりました。その亡くなる前の八月十日頃のことでございます。あの病気の時は、お医者さんの往診がいつも午後遅くでございました。診察がすんでからのお薬取りは夕方遅い頃でございます。そのお薬取りの役目が伊東静雄なのでございます。

その日も、いつものようにお薬もらいに行く静雄に、母は、夜の氷が足りないようだからお医者さんの帰りに氷を少し買つて来ておくれと、ふろしきと金を渡しました。あの人は「ウン」とうなづいて出て行きました。かなり長くお医者さんで待たされたらしく、なかなか帰つて参りません。母は遅いこと遅いことと気使つていますうち真黒な空模様に大粒の夕立でございます。加えて、恐ろしい稲光りと雷さんであります。母はびつくりしてお手伝いさんを走らせました。でもお医者さんへの道は二つあります。行き違つたあの人は、ぬれねずみになつて、小さな身体に片手に沢山の薬びんをさげ、片手にはふろしきに包んだ氷を下げて只今と帰つて参りました。母はとんで出て、「静ちゃん」と言うなり、あの人をふいてやることも忘れて、「お帰り」と抱きかかえて、「恐ろしかつたろう、えすかつたろう、ぬれたのう、ごめんねえ、ごめん」と泣き出しました。勢いよく帰つて来たあの人も又、母にすがりついて、雫の落つる顔を母の胸におし当てて、声を出して泣き出しました。座敷の入口に休んでいました私も泣きに泣きました。あれからもう五十三年になりますが、あの時のあの人のいとおしかつた小さなあの姿は、私には忘れることのできない姿でございます。

それから数日の後、あの潤三は亡くなりました。私と妹は、九月の末に全快致しました。それでも、十月の中頃から、こんどは又あの伊東静雄が発病致し、四ケ月近くも患つて重態でございました。しかし今度は、あの人は自分一人で、ゆき届いた母の看護で命が助かりました。五年生の二学期から三学期にかけての長患いでございましたが、幸い中学校も六年から入学致しました。

あの人は中学に通う間、朝六時半に家を出て、走るようにして諫早駅に着き、六時五十五分の汽車で大村中学校に四年通いました。私たちの家では、朝皆一緒に起きて、それぞれに仕事の役割がございました。それをすまして、皆で御飯でございます。伊東静雄の中学四年の頃は、どうだつたかはつきり致しませんが、一年二年の小さい頃は、棚と下の室の柱ふきとがあの人の役で、廊下は妹の仕事でありました。自分よりも高い棚や柱を、ぴよこんぴよこんと飛び上つたり、小さい足つぎをしたりして、ふいたものでございました。

勝気な母の躾けは厳しかつたなあ、六時半から中学校に行く子供にまでもあんなにしてと、私は今にして思えば考えます。だが、あの時は誰一人不平を言う者もなく、あたりまえのこととして皆楽しくやつたものでございました。

しかし、私たちの両親はいたつておおらかで、特に父は大まかな人で、お金のことも一切母まかせでありました。私たち子供も

又お金は各自自由に、いくらもらつていきます、何にします。」
というて自分で取つて使つたものでございました。何も特別裕福でもなければ、派手な生活でもありませんでしたが、普通並の豊かさと、おおらかさの中にのびのびと育ちました。
だがしかし、伊東静雄大学卒業の頃、父がある知人に無尽の保証をしていたらしゆうございますが、その人の失敗により、その無尽の掛金のかなりの金額を父が月々払つていたらしく、父の死後それがあの人の負担となり、すまなく思います。
ときに、世の学生さんたちは誰でも高校時代が一番楽しいらしゆうございますが、あの人も又学生時代で高校の時が一番楽しかつたようでございました。身体もわりと丈夫になり、休暇には友達もよくみえて、友達や弟達とあちこちに出かけたり、又泊りのお友達もよく見えたりして　いつも楽しく語り、校歌や寮歌を歌い、家の者も楽しかつたようでございました。
特に、高校入学電報の来た時のことは忘れられません。
待つていた電報がまいりました。見るなりあの人は、「来た来た。来た来た。」とそれこそ下から二階へ、二階から下へ、表から裏へ、裏から表へと、弟と二人で家中をいくわたりかまわつて喜びました。喜びながら笑いながら泣いていました。おそらく、いつの入学の時よりも嬉しかつたのだろうと私は思います。
父も母も皆も「よかつた。よかつた。」と泣いて喜びました。父と母のいた頃はあの時のことをよく話したものでございました。
そして、あの人が大学三年の時のことでございます。あの人は大阪三越の児童映画脚本募集に応募いたし、「美くしき朋輩達」という童話で、一等当選致しました。その原稿を夏休み中家で書いていましたが、書き上げる途中、ちよいちよい家中の者に読んで聞かせていたらしゆうございますが、いよいよほとんど出来上つたものを読んでいるところに私もいき合せましたが、読んでいるあの人の嬉しそうな顔と、聞いている皆の顔、殊に父と母との嬉しそうなあの顔が未だに忘れられません。
当選しました童話が映画となつて諌早にもまいりました。母は入場券を沢山買つて親類や近所に配りました。父と母とは諌早で上映されている間、毎晩毎晩見に行きました。父母生涯の喜びの中の、ほこらしい喜びの一つであつたろうと私は思います。
さて、あの人が患つて入院致しましたのは、昭和二十四年十月でございました。その間いく度か危篤状態になりましたが、次々と新薬に恵まれまして、又少しずつ快方に向つたりして過しました。病気中私は年に二回位ずつ見舞に上阪致しましたが、あの人はそれはそれは喜びました。私がまいりますれば、故郷の香りと味の物も、持つてまいりました。でも、あの人はほんの一口食べる物もあり、食べ得ない物もありますのに、あの人は喜んで喜んで、誰にも分けようともしないでいつまでも枕辺におくのであります。私がまいりますれば、私達二人に通ずる諌早弁があります。諌早弁で、諌早や諌早近在の山川を語り、故郷の事柄や故郷の人の話しをして、なつかしみました。それに又、二人でうなづき合える父母の残した思い出があり、兄弟の幼な日のことがあります。

花子さんにはすまないことでありますが（花子とはあの人の妻であります）、花子さんそつちのけで、あの人は疲れを忘れて私と語りました。花子さんは、わかるような、わからないような顔をして只笑いながら仲のよい御姉弟だこととながめていました。仲の良いことは私にだけではございません。弟にも妹にも、それはそれは良い兄でございました。

そして、あの人は幼い日に母に作つてもらつたお菜やおやつを私に作らせて、ほんの、一口二口しか食べないものを、「おいしかつた。お母さんに逢つたようだ。」と喜び、私がお茶を入れても、母とそつくりの姉だと言うしで、母を偲ぶ人でありました。

何日頃の上阪の時でございましたか記憶致しませんが、あの人は私が上阪致しました少し前に非常に下痢がひどくて苦しんだらしゆうございます。その下痢がやつとおさまつた時に行き合せました。その時、あの人は私に、「姉さん、一頃下痢がひどくて困つたよ。あの時お母さんがいたら胸にすがつて泣きたかつたよ。」と丸くすんだ目の奥に、涙さえ浮べて申しました。よほど苦しかつたのだろうと、私は只、「そうお。」というだけで私も泣き出しました。でも、私は思いました。妻があり子供もある年の身であつても、胸にすがつて泣きたかつたといつて偲ぶことのできる母のあつたあの人は実に幸せであり、又母がいたら、胸にすがつて泣きたかつたよ、といつてくれる子供のあつたあの母も又幸せな母だつたと、本当に泣きました。

皆様、母というものは子がいくつになつても、そしてその子にどんなに愛しい妻があつてもどんなに可愛い子があつても、いついつまでも、殊に苦しい時悲しい時にすがりたくなつてもらえる尊い存在だと私はしみじみと思います。

あの人はのみ薬の他にいろいろの注射があつたようでございます。ある時など注射にこられた看護婦さんにやせた腕をさしのべて、「看護婦さん、注射の針のさし場所がいよいよなくなつたようですねえ。探すのに苦労かけますねえ。」と笑うに笑えないことを、笑い事のように言つて、看護婦さんと私を笑わせました。いつも明るく笑わせ言をまじめな顔ですらすらと言う人でございました。

昭和二十八年三月十日、あの人の危篤の報せに、私も弟も上阪して看取り致しました。亡くなる前日の夕方、私も弟も花子さん達皆枕辺にあの人を見守つていましたら、あの人は皆さんに、「そんなに見つめられては死なねばなりませんよ。気楽にやりましょう、おひきとりなさいよ。」と最後まで私達を苦笑させました。

そのくせ自分は、「言える時に言うておきましようか。」と、亡き両親や兄達の戒名を唱え、私達に永久の別れを言い、そして息をひき取つた時には、ちやんと両手を合せて胸におさめていた人でございました。

あの人の詩は私にはよくわかりません。でも、読めば読んでいくうちにわかつて来るような気が致します。読めは読むほどに、

あの人の心がわかるような気が致します。読めばわかるのだ、わからないのは読み方が足りないのだ。とはあの人の持論でございました。

あの人は中学の時もよく読んでいた人でありました。高校、大学、そしてその後もずつといろいろの本をよく読んだ人でありました。病院の細い電燈の下でさえ寝ながら読もうとしますので、私がいた時はそれをよく止めたものでございました。

あの人が大学の時、私はあの人の下宿を二回訪ねましたが、全く本の中にいた人でありました。大した学資ももらつてなかつたろうのにこれでは本代になつてしもうのではなかろうかとさえ思うほどでございました。

そしてあの人は弟にはむろん私や妹にも、「人は読まねばならんですよ、いろいろのものを読まねば人間は出来上つていきません。そして又読まねば話すことも書くことも、考ゆることもできないでしよう。読むことよ、読みなさいよ。」とよく言うたものでございました。

あの人は病気中、苦しいとも痛いとも口に出しては申しませんでしたが、只、未だ生きたい、寝ながらでもよいから生きたい、そして小説も書きたい。詩も書きたい。読みたい本も沢山あるのだ。とよく言いました。私たちも生かしたい。何とかして生かしたい。と花子さんはじめ一生懸命で看護致しました。又、あの人の親しくしていただく方々も、尚未だお逢いしたこともない方々、沢山の方たちが、あの辺地の病院にお見舞下さつたり、お手紙を下さつたりしてあの人を励まし、又あの人の全快をお祈りして下さつたのでございます。遠く離れています私も、せめてお祈りをとよくお祈り致しました。私の家に五十センチ位の石像のきれいなお観音様をおまつりしていました。そのお観音様に、朝夕観音経を一生懸命であげながら、どうぞやあの人をお助け下さいませ、もし寿命のないものでございましたなら私の命と替えさして下さいませ、と一生懸命でお祈りしお願い致しました。

又、私の家から少し東南に、十六キロ位離れた、唐比、という所に、十七センチ位のきれいなきれいな白水昌のお観音様をおまつりしてある小さな禅寺がございます。そちらの御住職の奥さんの御母堂さんに親しくさして頂いていましたので、その方に伊東静雄の写真をあずけて、そのお観音様にあけくれのお祈りをお願い致していました。それで私も時々おまいりをしてお願い申していました。あの人にもあけくれに、お観音様のお唱名をお唱え下さいよ、そしたら苦しい時には苦しみをうすらいで下さいますよ。と申していましたら、あの人もよく唱えていたらしゆうございます。

かく、皆でお祈りもし、お願いも致しました。あの人も又長い間苦しみもし、生きよう生きようとどんなにか努力も致しましたものを、あの人は私たちに数々の教えと悲しみを残して、とうとう逝つてしまいました。

皆様、人の定めというものは、人の寿命というものは、いかに祈つても、いかに願つても、かなえてもらえるものでなく、引き

延すことのできないあわれな悲しいことでございます。

あの人を人様に御覧頂きますれば、足りないところの、つまらないところの多いあの人だつたと思います。だが、肉親のうぬぼれには、やさしく、あたたかい人で、ものごとは奥深く、直に考ふる人であつたと思います。そしてどこか気の弱い、愛しい弟でございました。

私の寿命を絶つてあの人の寿命を延して下さいと願いました私が、あの人が逝つて二十年、未だにかく長らえさしてもらつています。私の夫、両親、あの人をはじめ身近な肉親がわりに若死に致しておりますのに、私だけが、と、亡き人たちにすまなく思いながら、明け暮れに仏の世話をさしてもらつています。

又、あの人が逝きまして二十年、年々に若い男女の大学生さん達が、卒論に伊東静雄を書きますから話してくれとか、高校の文学部で伊東静雄研究をしているから教えて下さい。といつたりして、五人六人とうちつれて訪ねて下さる学生さん達があつたり致します。

又お墓におまいりしますれば、時々どなたがお上げ下さつたのか、きれいなきれいなお花をおあげして下さつている方々があつたり致します。こんな時の嬉しさとありがたさは、言葉につくせぬものでございます。

それに又、諫早で毎年催して下さる「菜の花忌」にも、あちらこちらから沢山の方々のお集いを頂きます。

今日は又こうして、あの人のお逢いしない方々でございましようけれども、作品を通していろいろとお話し合つて下さることは、あの人が生きていて、皆様とお話し致すことに勝る親しさと尊さがあるように私には思われます。あの人もきつとそうではなかろうかと存じます。

殊に今日のこのお集いは、昔あの人のかわいいかわいい学生さんであられたという水本先生や、こちらの沢山の先生方のおきも入りとお聞き致しまして、私は御縁の不思議さと有難さに、しみじみと感謝致します。そして、あの人もきつとびつくり仰天致し、その感激もひとしおのことと存じます。

最後でございますが、皆様、どうぞどうぞお身体をお大事にな さつてこの上共御研鑽あつて、日本文学に御寄与下さいますように念じあげます。尚、皆様方のお幸せを心をこめてお祈り致します。

とりとめもないことに皆様の大事なお時間を長く頂きましたことを、有難くお礼申し上げます。

失礼致しました。

（長崎造船大学人文科学研究室「人文研究」1972.7 創刊号）